

国連人権高等弁務官事務所へ キューバに関するレポートを送りました

キューバ友好円卓会議は9月23日、国連人権高等弁務官事務所（OHCHR、本部・ジュネーブ）あてに「友好団体から見たキューバ共和国」と題するレポートを送りました。

国連人権高等弁務官事務所は国連機関の一つですが、4年ごとに国連加盟各国の人権状況に関する報告書を発表しています。その報告書をまとめるにあたっては世界のNPO、労組、市民団体、知識人団体などにレポートの提出を求めており、キューバ友好円卓会議もキューバに関する感想を求められました。そこで、「友好団体から見たキューバ共和国」と題するレポートを提出したわけですが、その全文は次の通りです。

友好団体から見た キューバ共和国

2012年9月20日

キューバ友好円卓会議・共同代表

岩垂 弘

「キューバ友好円卓会議」は、キューバ共和国との友好促進を目指す日本人の団体です。日本には、キューバ共和国との友好促進を掲げて活動している団体がいくつもあり、キューバ友好円卓会議もその一つですが、いかなる政党からも独立した、一般市民中心の民間団体であるという点に特徴があります。

キューバ友好円卓会議は2003年9月に設立されました。設立の中心になったのは1998年にキューバを訪問した学者、ジャーナリスト、生活協同組合員らでした。いくつかの団体と個人がこれに加盟しました。

キューバ友好円卓会議設立の目的は「キューバとの友好促進」と「キューバに関する情報交換と情報の発信」でした。というのは、まず、日本国民の間でキューバに対する関心が高いにもかかわらず、キューバは日本から遠く離れた国であるためこの国に関する情報が極めて乏しかったからです。それに、それまではキューバに関する情報は米国経由でもたらされるものが圧倒的に多かったため、キューバの実情が日本になかなか正確に伝わりにくいという傾向が強かった。だから、キューバに関する情報をできるだけ正確に、それも直に日本国民に伝えようと、円卓会議設立の中心メンバーは思い立ったわけです。

以来、そうした目標を実現するために、私たちは年に1～2回、イベント（フォーラム、シンポジウム、講演会など）を主として東京で開催してきました。

現在、個人会員は120人を数えます。主な団体会員には、日本における有力な生活協同組合組織の一つ、パルシステム生活協同組合連合会（組合員134万人、本部・東京）、国際交流NGOのピースポート（本部・東京）がいます。

このほか、会報『サルー！』の読者が約600人おりま

す。円卓会議の運営は、会費やイベント参加費によってまかなわれています。

私たちがこれまでイベントを通じて努力してきたことは、キューバの実情を出来るだけ多面的かつ正確に日本国民に伝えることでしたが、とりわけ、この国の医療、教育、有機農業の実態を伝えようと努めてきました。なぜなら、これらの分野で、この国が世界的な水準に達しており、大きな成果を上げていると考えたからです。さらに、日本もこの分野でキューバから学ぶことが多いのではないかと考えたからです。

まず、キューバにおける医療の現状を知るために、キューバから医師を招いて話を聞きました。この中には、キューバの工業大臣だったチェ・ゲバラの長女で小児科医のアレイダ・ゲバラさんも含まれています。また、円卓会議が組織した医療視察団をキューバ派遣しました。さらに、キューバの医療に詳しい日本人医師や研究者の話を聞くなどしてきました。

この結果、私たちはこの国の医療水準が世界的にも高いことを改めて認識しました。まず、医師の数ですが、2003年時点で66,000余人。人口比では日本の3倍以上でした。医療水準を示す指標の一つに乳幼児死亡率がありますが、2006年時点でのキューバのそれは1000人あたり5・8人で、これはイギリスと同じレベル、米国より低い数値でした。緑内障手術、心臓外科、精神医療などでは世界のトップレベルにあることも知りました。

そして、何よりも私たちの関心を集めたのは「ファミリードクター制度」です。1人の医師が120～160家族を受け持ち、住民1人ひとりの生活状況を把握した上で予防や治療を行い、避妊や出産、性教育などの相談にのります。つまり、地域医療が国の隅々にまで完備されているということです。全医師の半数がこのファミリードクターとのことでした。

各地域には「ポリクリニック」と呼ばれる総合診療所があります。ファミリードクターの手に負えない患者はここで治療を受けることができます。ここには、入院ベッドがなく、入院を必要とする患者は病院に行くことになります。つまり「ファミリードクター——総合診療所——病院」という3段階のネットワークが、全国民をカバーしているわけです。しかも、これらの医療が国民に無

料で提供されていることも、私たちの注目を集めました。日本には健康保険制度がありますが、近年は国家財政の赤字増大から個人負担が増えつつあり、医療費が無料というキューバに羨望の念をもつ日本人も少なくありません。

WHOによると、2009年のキューバの平均寿命は78歳で、世界ランキング35位。ちなみに米国は79歳で29位。キューバは先進国並みの長寿国と言っていいでしょう。充実した医療制度が、キューバ人の平均寿命を押し上げたとみて間違いありません。

この国の医療による国際貢献も特筆に値します。いわば国際的な人道支援活動です。

この問題に関しては、私たちの招き2008年に来日したアレイダ・ゲバラさんが、キューバによる医療を通じた途上国援助について講演し、聴衆に感銘を与えたが、在キューバ日本大使館専門調査員の山田泰子さんも、2009年1月に同大使館で行った報告をまとめた調査報告書『キューバの医療協力～軍事援助から白衣外交～』で「キューバの医療協力の歴史は、1960年のチリ地震に対する支援、一般的には、14ヶ月の長期に亘って医師団の派遣が行われた1963年のアルジェリア支援に遡ると言われる。キューバは、それ以来2008年8月までに、103ヶ国に約18万5000人の医療関係者（医療分野の専門家及び技師）を派遣する一方、医療従事者養成のため、キューバ国内に4万名以上の外国人学生を受け入れて来た」と述べています。

医療を通じた対外援助の対象地域は、主としてラテン・アメリカ、アフリカ、アジアの途上国とのことです。

キューバはまた、ソ連のチェルノブイリ原発事故にあたっては、白ロシア、ウクライナから多数の被曝児童を受け入れ、治療を無料で行ってきました。このことも特筆に値します。

2005年にキューバで創設された「ヘンリー・リープ国際救助隊」も日本の市民の関心を集めています。ヘンリー・リープとは、キューバ独立戦争の時に、キューバ側に立って戦った米国人の名前とのことです。この国際救助隊には、キューバの医師、看護師、技師が所属しており、災害に見舞われた国・地域に派遣され、医療活動を行っているとのことです。私たちが2006年にキューバから招いた若い女性医師は、この国際救助隊の一員としてパキスタンで医療活動に従事した経験を話し、聴衆に感銘を与えました。

私たちはキューバの教育制度についても、その実情を広く日本の市民に伝えたいと努めてきました。日本の市民にとっては、キューバでは、幼稚園から大学まで、すべて無料という点にとりわけ関心があるようです。これには、日本では高等教育を受けるには高額の授業料を払わなくてはならない、という事情が響いているようです。

日本では、キューバは有機農業の先進国、有機農業大国とみられています。

キューバで有機農業が盛んになったのは1990年代の後半からとみられています。きっかけは、ソ連の崩壊（1991年）でした。それまでのキューバは、1959年の革命以来、米国による経済封鎖が続いているということもあって、石油、食料、農薬、化学肥料から日用品にいたるまで、ソ連に強く依存していました。それらが、ソ連の崩壊によってほとんど途絶するという事態に直面してしまっただけです。

当時のキューバの国内食料自給率は40%そこそこ。下手をすると大量の餓死者を出しかねませんでした。こうした危機下で、キューバ国民が選択したのは自ら食料を生産しようという道でした。それも、農薬や化学肥料なしの農業、すなわち有機農業でした。こうして、キューバは一人の餓死者を出すこともなく、野菜を完全自給することに成功しました。要するに、ソ連崩壊によりやむを得ず始めた有機農業が、キューバの危機を救ったのです。

日本でも、農薬の多用による弊害が問題化しつつある時期でした。食料の農薬汚染、人間の健康への影響、環境破壊といった問題がクローズアップされた時期でした。それだけに、農薬を使わない、あるいは農薬の使用を減らす農業への関心が高まり、キューバの有機農業に目が注がれるようになりました。キューバを訪問する農民も増えました。私たちは、キューバの有機農業を視察してきた農民を招いてフォーラムを開きました。

2011年3月、日本では、大地震と津波により東京電力福島原子力発電所で事故が起きました。これを受けて、私たちは同年8月、「キューバはエネルギー危機をどう乗り越えたのか」をテーマにフォーラムを開催し、ソ連崩壊後、深刻な石油不足に直面しながらも、原子力発電所を建設せず、再生可能な自然エネルギーの開発に挑戦したキューバの行き方を市民に紹介しました。

最後に一言。国際交流NGOピースボートは、世界各地の人々との交流を促進するために毎年、地球一周の船旅を実施していますが、船旅実施後、乗船者に「もう一度訪ねてみたい国は」と問うと、キューバを挙げる人が一番多いといえます。

どうやら、キューバは日本人にとって「大変魅力ある国」であるようです。その理由の一つは、キューバ人の開放的、楽天的気風にあるようです。それに、キューバが何よりも「平等」と「連帯」を基本的な国是として国づくりをしようと努めていることに惹かれる日本人が多いからだと思われます。日本では、このところ、国民間で「経済的格差」が拡大していると感じる人が増えているからでしょう。

これまでの活動を振り返って残念なことがあります。それは、キューバとの人的交流が日本側の一方的な交流で終わっていることです。つまり、日本側から多くの市民がキューバを訪問しましたが、キューバから日本へ渡航してくれたキューバ国民はほとんどありませんでした。国際交流は相互交流が原則です。キューバ国民の日本訪問が実現するよう願ってやみません。